

氏名	民部 有桂
ヨミガナ	ミンブ ユカ
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第695号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）初期フランドル絵画の彩色技法研究 —国立西洋美術館所蔵Joos van Cleve《三連祭壇画：キリスト磔刑》の模写実験を通して—

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	土屋 裕子
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	塚田 全彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	秋本 貴透
（副査）	国立民族学博物館	名誉教授		森田 恒之
（副査）	東京藝術大学	名誉教授	（美術学部）	木島 隆康

（論文内容の要旨）

研究目的

15世紀から16世紀初頭にかけてヨーロッパ北方地域に興った初期フランドル絵画は、平滑で透明感ある彩色が特徴である。白亜地の白を基調とした明るい色の平滑な下地層の上に、透明や不透明の油絵具による下層彩色を薄くのせ、その上から仕上げに透明な油絵具を薄く重ねて描かれている。画中に描かれる空や大地、人々の色とりどりの衣服、また柔らかな肌は、それぞれの色が大変鮮やかに澄み渡っている。本研究では、この彩色の美しい透明感について着目した。本研究では、国立西洋美術館所蔵の16世紀初頭に描かれた初期フランドル絵画Joos van Cleve《三連祭壇画：キリスト磔刑》の模写実験を行い、その彩色技法の特徴である透明感の再現を試みる。Joos van Cleveは、16世紀前半にフランドル地方で大工房を構え、卓越した技術と優美な色彩感覚で活躍した職人的画家である。

本研究の目的は入念な肉眼観察と光学調査の結果を利用して、初期フランドル絵画の彩色技法を再確認し、平滑で透明感のある彩色の工程に対し模写による再現を試みることにある。模写に当たっては原作品制作当時の絵具を含む画材の情報に不詳のものが多いため、今回は仕上がりの色味と外観を重視した現行の油絵具を主に使用し、彩色手順の検討を主眼とした。

本研究にあたり作品を所蔵する国立西洋美術館で熟覧調査と部分拡大写真および赤外線反射写真の撮影を主とする光学調査を行った。X線透過画像の撮影は所蔵者側の諸事情で行えなかった。このため、Joos van Cleveの他作品を含む初期フランドル絵画作品5点の既公開X線透過画像を参考にしてJoos van Cleveの技法的特徴を類推した。こうして得た事項を参考に絵画制作者の視点を活かした検討を加えながら、特色ある複数の部分について模写制作を通して透明感ある絵画の再現を試みた。

論文構成と研究結果

序章では、本研究の背景とその目的について自らの制作体験と関連付けながら概説した。

第1章では、西洋絵画技法の先行研究を概観した。先行研究は、19世紀から20世紀前半までの古文書の発見と解説を主とするものと、20世紀後半以降の自然科学的手法を応用した保存修復に伴う新事実の発見と検討、さらにはそのための技術開発に関するものに大別できる。前者の主な業績はCharles Lock Eastlake、Mary P. Merrifield、Albert Ilg、Ernst Berger、Daniel V. Thompsonなどによるものである。後者の主なものはPaul Coremansによるvan Eyke《ヘントの祭壇画》調査修復報告(1953)や長波長赤外を利用したJ. R. J. van Asperen de Boerによる同作品の再調査(1967)、1990年代に始まるロンドン・ナショナル・ギャラリー科学研究室による一連の初期フランドル絵画の所蔵品調査研究などがある。本研究

では、顔料とメディウム、下地層のプライミングなどに関する情報はロンドン・ナショナル・ギャラリーの報告を参考にした。

第2章では、前記の初期フランドル絵画5点のX線透過画像に基づいて、白色絵具とくに鉛白の使い方に注目して比較し、Joos van Cleveの特色を抽出した。次に、国立西洋美術館所蔵作品の赤外線画像から、下素描での線の描法と表層彩色の筆の動きを比較して、輪郭線・線描・彩色の関係を考察した。

第3章は模写実験の記録である。対象作品から1辺が10cmの正方形の範囲を15箇所選択した。その後、模写に用いる現代の材料と道具を検討し、その上で透明感を再現することを目的とした再現模写実験を行った。絵具の重ね方、メディウムの量、下地層のプライミング、表層彩色の筆致方向、下素描などを調整し、異なる手法で9回の実験を行った。初期フランドル絵画の特徴には、暗い色による輪郭線の描写や形に沿った輪郭線内部の線描、発色の良い不透明な絵具による下層彩色、透明色の絵具による上層彩色などが挙げられ、再現模写によってこれら全ての要素が透明感と結びついていることを明らかにした。

終章では、初期フランドル絵画に特徴的な透明感が生まれるその制作工程について推測した。その上で白色絵具の限定的な使用と輪郭線内部の線描の揃いという特徴が、初期フランドル絵画の特徴的な透明感を形作り、中世からの伝統的な技法を色濃く引き継いでいることを研究結果から考察した。

本研究は、初期フランドル絵画の透明感が生まれる仕組みを導き出すため、これまでに発表された技法研究史を振り返り、研究対象作品およびその類似作品の絵画構造から実際の彩色技法の工程を導き出した。熟覧調査と写真情報のみでも、再現模写を組み合わせることにより、自然科学的な情報が不十分な作品についても、技法材料を推測できる可能性を示唆した。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、15世紀から16世紀初頭にかけてヨーロッパ北方地域に興った初期フランドル絵画の透明感ある彩色について、その透明感を生み出す諸要素を明らかにした研究である。初期フランドル絵画は、平滑で明るい下地層の上に透明や不透明な油絵具を薄く重ねていく彩色で描かれる。平滑で明るい下地層があることは90年代の科学調査の結果により明らかとなったが、それ以降の実制作を伴う絵画技法研究において制作工程の詳細な検証がされていない。民部は修士研究から明るい下地層へ平滑に彩色する難しさに着目して研究を重ねてきた。本論文では、初期フランドル絵画の透明感が生まれる仕組みを導き出すため、これまでに発表された技法研究史を振り返り、研究対象作品およびその類似作品の絵画構造から実際の彩色技法の工程を引き出す試みをおこなった。

序章ではこれまでの模写制作体験と関連付けながら、本研究の背景と目的について概説している。模写対象作品は、国立西洋美術館所蔵16世紀初頭の初期フランドル絵画Joos van Cleve《三連祭壇画：キリスト磔刑》で、本作品は同美術館が所蔵する世界的にも質の高いフランドル絵画である。

第1章では、先行研究として、これまでの西洋絵画技法研究史の流れを取り上げている。まず19世紀から20世紀前半までの古文書研究を挙げ、Charles Lock Eastlake、Mary P. Merrifield、Albert Ilg、Ernst Berger、Daniel V. Thompsonなどの記述の中から初期フランドル絵画の特徴を探っている。次に自然科学的手法を応用した保存修復にともなう新発見や科学的手法の技術開発についての20世紀後半以降の論文の研究での成果に注目した。1953年のPaul Coremansによるvan Eyke《ヘントの祭壇画》調査修復報告、1967年の長波長赤外を利用したJ. R. J. van Asperen de Boerによる同作品の再調査、さらに1990年代に始まるロンドン・ナショナル・ギャラリー科学研究室による調査といった一連の初期フランドル絵画の所蔵品調査研究である。こうした大規模な文献レビューで今まで明らかとなっている初期フランドル絵画技法の特徴について改めて考察している。

第2章では、本論の模写対象作品であるJoos van Cleve《三連祭壇画：キリスト磔刑》の熟覧調査や赤外線撮影に基づき、その具体的な描き方の法則を研究した。第1節では、X線画像分析をおこなった。国立西洋美術館では技法を読み解くうえで重要な位置を占めるX線透過撮影は許可されなかったが、世界中で発表さ

れている類似作品のX線透過画像5種類を利用することでこれを補うことを試みた。民部は文化財保存学で培った光学調査の分析能力を存分に発揮し、ここで白色絵具の鉛白の使い方に注目して比較し、Joos van Cleveの特色を抽出している。第2節では国立西洋美術館所蔵作品の赤外線画像から、下素描での線の描法と表層彩色のブラッシュワークを比較し、輪郭線・線描・彩色の関係を考察した。ここで民部は作品の熟覧や写真画像により、輪郭線のほか、画面に残されているブラッシュワークの方向に注目し、改めて描き起こしをおこない、それに基づいて模写実験を進めた。模写実験と光学調査結果を組み合わせることで、このブラッシュワークが初期フランドル絵画の透明性の再現において考慮すべき重要な要素であることを見出した。絵画技法材料研究で、この点に注目した論考は新しい。

第3章はこれまでのデータと考察に基づいた模写実験の記録である。1辺が10cmの正方形の支持体を複数作成し、顔料とメディウム、下地層のプライミングなどの条件を変えて粘り強く数々の実験をしている。第1節では再現に用いた材料について触れ、第2、3節では実施した15箇所 9種類の再現実験についてその失敗例の考察も含め、詳細な実験記録とし、ここから実際の絵画技法がどのようなものであったのか、独自の論考を展開している。論考の中で、彩色前の輪郭線の描写や発色の良い不透明な絵具による下層彩色、透明色の絵具による上層彩色、形に沿ったブラッシュワークの方向などの要素が透明感に繋がっていることを挙げている。

終章では、各章を踏まえて初期フランドル絵画の特徴を総括し、彩色工程を実際に推測している。その上で白色絵具の使用方法和輪郭線内部のブラッシュワークが初期フランドル絵画とその後の絵画様式間で大きな特徴差を与えていることを、ドイツの美術史家ハインリヒ・ヴェルフリンの考察を交えながら論考している。

以上、本論文は、技法書の情報更新という強い熱意を持ち、古典技法研究をおこなってきた民部が、描き手の立場で改めて古文献の確認、作品の熟覧そして自然科学的手法で得たデータの分析に取り組み、フランドル絵画技法の研究に寄与する新しい情報となる論考である。入念な肉眼観察と光学調査の結果を利用して、現代の自然科学的分析のデータに対して新たな論考を展開し、民部自らの手による再現実験を組み合わせることで、より具体的な技法を導き出した点は評価に値する。

公開報告会では、民部は参加者から示された数多くの質疑に明快かつ適切な回答を与えた。

以上の点から、本論文は博士（文化財）の学位を授与するに十分な内容である。